

研究成果概要

平成17年度採択分
平成20年7月31日作成

研究課題名 集客地の活性化に資する、道路のホスピタリティ表現手法についての研究開発
研究代表者及び共同研究者

- ・研究代表者氏名(ふりがな) 堀 繁(ほりしげる)
- ・共同研究者氏名(ふりがな) 篠原修(しのはらおさむ)、内藤廣(ないとうひろし)、
中井祐(なかいゆう)

所属研究機関・役職 東京大学 アジア生物資源環境研究センター・教授

【研究の概要】

商店街、温泉地、観光地などの集客地の活性化が全国的課題となっているが、来訪者の誰もが「歩いてみたい」と思う道路を整備できれば、その活性化に道路が貢献できるはずである。そこで、道に魅力を出すホスピタリティ表現について、その概念を整理し、表現形を99にタイプ分類し、写真が集まった52タイプについてわかりやすく解説した。現在残りのタイプも写真収集を続けており、近々の出版を予定している。

【キーワード】

集客地、商店街の活性化、温泉地の活性化、観光地の活性化、魅力ある道路、街路、ホスピタリティ表現、もてなしの演出、来訪者の評価

(研究開始当初の背景・動機)

観光地、温泉地、商店街など、地域を支えてきた集客地の多くが苦戦し、それに伴って地域が活気を失っている。集客地の苦戦は、集客地自体が魅力を失ったことが大きな要因で、一言で言えば「楽しくない」のだが、集客地の空間の基本構成は通常、道と沿道の建物とで成り立っているから、楽しくないのは沿道の建物もさることながら、道路が魅力的でないことも大きく影響していると考えた。そこで、あらためて人を集めている地区の道路を観察したところ、車では走りにくいと一目でわかる舗装となっている、来訪者に「どうぞ、おやすみください」と優しく誘いかけるベンチがある

など、車よりも人を大事にした表現をして人間・来訪者を居心地良くもてなす設えが道路に施されていることの多いことに気が付いた。これは人に対するもてなしの表現、つまりホスピタリティ表現が豊かであると整理でき、この道路のホスピタリティ表現は集客地にとってたいへん重要な意味を持つと考えるに至った。

(研究の目的)

本研究は道路整備によって、商店街、観光地、温泉地などの集客地を活性化することを目的に、地域住民や商店主が「やれば自分たちの街もよくなりそうだ」と思うようにわかりやすく、道路のホスピタリティ

表現について、その考えや、多様な表現の型の提示・解説を行おうとしたものである。

（研究の方法）

現地調査で事例を出来るだけ沢山収集し、分析し、概念整理と型のタイプ分類を行い、わかりやすく解説をつけていくという方法で行った。外注は主にデータ整理であった。

（研究の主な成果）

集客地における道路のホスピタリティを、安心型、人重視型、車軽視型、自己領域形成型などに分けて整備することで、ホスピタリティの豊かさをわかりやすく示した。

また、ホスピタリティを表現するためには形状こそが重要であることを示し、実際の道路整備で使えるように、ホスピタリティ表現の形を99タイプの型に整理した。

各タイプについて、道路を専門としない人を想定して、見開き2ページで、写真を沢山添えて、平易な用語・文で解説した（写真1、写真2参照）。



写真1 自己領域非形成型ベンチ

ベンチで重要なことは高い材料を使うことではない。居心地よく座れそうに見える自己領域（自分の居場所）を設けてやることだ。この例は自己領域がないため、もてなされているように見えない。



写真2 自己領域形成型ベンチ

自己領域が設けられていて、歩行者の邪魔にならずに休むことができる。写真1よりずっと町がもてなしてくれているように見える。

（主な発表論文）

出版を準備中である。

（今後の展望）

本研究のホスピタリティ表現理論で実際に道路を整備した温泉地がゴールデンウィークに人を集め、利用者に好評であった。今後は実際の整備に用いて、参考事例を増やしていくことが求められるが、それには広く理解を浸透させるために何が必要か、探っていくことが課題である。

（道路政策の質の向上への寄与）

道路横断構成を大きく変えるなど、高い魅力を出すには従来の標準設計と異なったことが必要になる場合もある。一方、舗装のちょっとした工夫など比較的簡単に出来る（但し、それなりにしか魅力は出ないが）こともあるので、実際の道路整備に使い、商店街や観光地の活性化に資する道路政策の展開に寄与すると考える。